

問４－２．４月から５月（フェーズ３）に、そのほかの母子保健に関わる事（例えば、外国人母子への対応、親を亡くした子どもへの対応、性被害の予防など）で支援したことはありますか。必要だったと思う支援（物資、場所、周知方法などを含めて）がありますか。また、経験された困難やその解決策などをお聞かせください。
問５－１．昨年６月から９月まで（フェーズ４）に、妊産婦や乳幼児をもつ母親がいましたか。障がい児や低出生体重児をもつ母親がいましたか。いた場合、どのような支援（物資、場所、周知方法などを含めて）をしましたか。あるいは、どのような支援が必要だったと思いますか（不足していた物資を含めて）。また、経験された困難やその解決策などをお聞かせください。
・学校保健の中で、子どもの反応が出てきた。死体ごっこ、小学校低学年が海に浮かんだ死体をマネ。どう対応するか、養護教員の先生と連携、相談。文科省で、様々な相談事業を入れた。 ・精神保健、心のケアわかるが文科省関係だけでもでいっぱい来ると言われた。不登校の子、震災前よりも増えている。
問５－２．６月から９月まで（フェーズ４）に、そのほかの母子保健に関わる事（例えば、外国人母子への対応、親を亡くした子どもへの対応、性被害の予防など）で支援したことはありますか。必要だったと思う支援がありますか。また、経験した困難なことやその解決策などがあればお聞かせください。
問６－１．昨年１０月以降から現在まで（フェーズ４）に、妊産婦や乳幼児をもつ母子、障がい児や低出生体重児をもつ母２に対しどのような支援（物資、場所、周知方法などを含めて）をしましたか。あるいは、どのような支援が必要だったと思いますか（不足していた物資を含めて）。また、経験した困難なことやその解決策などがあればお聞かせください。
問６－２．１０月以降から現在まで（フェーズ４）にそのほかの母子保健に関わる事（例えば、外国人母子への対応、親を亡くした子どもへの対応、性被害の予防など）で支援したことはありますか。また、必要だったと思う支援がありますか。また、経験した困難なことやその解決策などがあればお聞かせください。
問７．発災前には、どのような母子保健活動をしていましたか。その時に課題であったことは、発災後はいかがでしたか。
・地域の人に必要とされつながること。顔でつながるいい仕事すると、支援の保健師が応援で来ても色々相談来る。住民の役にたっていなければ相談は来ない。丁寧に住民と接していくこと、地域に出ていくこと、今回は痛切に感じる。 ・被災前と被災後の大きな違いは、活動を一緒にする仲間が圧倒的に増えたということ。医療関係、保健関係だけでなく、商工会、一般の組織、市民活動グループ等。今までは自分たちの

自己満足。

- ・大きな違いはそれまで健診に心理の医師が入っていないこと。震災後は心理の医師が入り、一緒に母子健診。赤ちゃん訪問に同行。
- ・母子保健事業での新生児訪問、民生委員での養育関連赤ちゃん訪問も同。元々保健師と民生委員とで行っていた。今回、民生委員の児童委員、地域の保健推進委員と一緒に回った。
- ・母子がだんだん減ってきている。教育問題と母親がどこに住むのかは関係がある。子育て支援センターも作った、子どもの声は聞こえる場所で生活できている。

問 8. 災害を経験され、平時から必要な母子保健活動として、どのようなことがあると思われますか。

- ・母子は遅れたという意識。まずは救護所での対応、透析の人、精神の人、薬を切らしてはいけな人、慢性的に輸血を必要な人、まずは医療につなげることが一番最初。それから妊婦さんでした。
- ・様々な専門家が関わった、何を助けてくれる専門家かわからなかった。普段からしっかり知ること。アンテナを立てておくこと、いざという時判断がつかない。
- ・支援者に信頼できる方がいた。何を相談しても次々と紹介されつなげていけた。何を頼んでも力になってもらえた、ありがたかった。
- ・シミュレーションは必要。在宅ローラーへの取り組みも、平成 15 年松島地震、応援保健師として活動、全戸訪問用調査用紙を作成、あの経験があったからリアルに考えられる、マニュアルは必要。
- ・県主催で有事に集まる人たちでの会議に参加。自分の頭の中に入っていた、自衛隊がどういう時にどう動いてくれるか。被災して初めて自衛隊に会うのとは大違いだった。
- ・被災前に有事のシミュレーション会議に出席したことが大きい、リアルにシミュレーションする機会、それを整理するマニュアルは必要。
- ・松島地震経験の応援チームの経験も大きい。とにかく何も無いから、調査用紙をつくることから始めた。名前を聞けばいいのか、何を聞けばいいのか、フォーマットをどうやって作るかなど。
- ・震災後定期的に入ってくださった医師とも震災前から母子保健の健診で定期的に来てくださっていた。震災前に知っていた医師と会うだけでうれしくなった、何でも相談できた。
- ・一緒に乗り越えて来た、なんでも相談できる。そうしたつながりのある支援者を増やした方がいい。
- ・被災前に来ていた医師、地域医療のことを熱心にやられている医師、医師が熟知していらしたら全部コーディネートしてくださった。やれる人がそこでやるということ、適材適所。
- ・保健師も避難所に徹底的にかかわった地域、そうでないところもある。私たちは体育館に常駐、在宅避難者は支援の保健師さんたちに。外出してしまうと調整ができない、うちの保健師は分散配置しなくてよかった。小さいところは一緒に経験して、一緒にやった方がいい。
- ・支援保健師も自分たちで引き継ぎ動いてくださった。長期で来ていただいた県外の保健師に

は助かった。単発できた保健師の整理は大変。

- ・外国の医師、いないと思いました。知り合いの伝手で来る、こういった情報が本部の方から来る、個別に来るより医療ボランティアのノウハウ持っている組織に属してから来てほしい、個別対応は大変。

- ・支援医師がいて地域を回ってもらった。この状況をわからないで医療をされるとそのクレームがこちらに来る。

- ・あばら骨方式で連携、「イーハトーブ」のシステムで母子手帳の記録が残っている、カルチャーショック。学会で伺い、沿岸部と内陸がつながっていて、そこに母子手帳情報が入っている、それはすごい。

- ・以前は保健所も地域担当制だった。このことならこの人に相談する、業務担当制になり精神担当、母子保健担当に分かれた。会議では会うけれど一緒に活動することがない。

- ・精神保健を担当していた保健師さんが被災後来てずっと活動。県の保健師ともつながりができた。元々地区担当の保健師とも顔見知り、その人に会うと安心していろいろ相談ができた。

- ・保健所、地区担当の保健師を配分してほしい。一緒に作戦を考える人、一緒に作戦を考えてくれる頭脳がほしい。

- ・何もかも保健の中でやらなくてはと思わなくてもいい、そこは切り離して、必要な時につなぐ、連携。

- ・子ども達は何十人も学校で亡くなっている、小学校の判断・対応の良悪か、大きな被害を出した。学校関係の専門家に相談したい人、学校関係者以外、文科省以外の、心のケアの方に相談したい人様々。

- ・学校で亡くなった方への心のケアの問題、天災と人災のある場合のケア。担当保健師、学校でやっているから地域には来ないでほしい、逆に学校では嫌、地域の保健師に相談させてという人、対応難しい。

- ・住民10人に1人はだれかを亡くしてる、喪失体験。節目の日は大事にしている地域、集まって一緒に何かをすること、必要。

- ・心のケアは保健師がハイリスクな人をどうにかしようとする。住民同志、母子でいえば子どもを持つ親同士が、支援センターに来て言い合えること、普段のつながり大事。

- ・どんな時でも現状把握と課題化。妊婦・新生児・乳幼児等の対象者現状把握。母子保健に関わる人、モノ(場所・物品・社会資源)の把握。

- ・平常時にしておくべきこと、妊婦・新生児・乳幼児の対象者との繋がり、顔の見える関係。母子保健に関わる人との繋がり。母子保健に関わる団体を知る。

- ・平常時に準備しておくべきこと、被災を想定し、妊婦・乳幼児が生きるための備蓄(ミルク0歳人数×6日分、哺乳瓶、哺乳瓶消毒、調乳用水、ポット、紙コップ、スポイト、オムツ、おしりふき)

- ・平常時に準備しておくべきこと、情報管理。乳幼児台帳、乳幼児アレルギー情報・予防接種台帳・障害児等訪問記録などボディ保険に関する情報管理。

- ・ 平常時に準備しておくべきこと、マニュアルシュミレーション。
- ・ つながる・つなげる・つながっている。住民とつながっていることは保健活動の原点。その活動を支えが地域の医師や大学病院、専門家の方々とつながること、専門家を住民につなげること。
- ・ 専門家とつながっていることで我々が安心感を持って保健活動ができる。つながりは継続的なもの。変化しながら延々と続いてゆく課題の圧迫感の中で、どう活動できるか。つながること大事。

問 9. 支援者ご本人やそのご家族の健康管理、あるいは生活管理をどのようにしていましたか。
また、どのように健康管理や生活管理をする必要があると思いますか。

インタビューガイド

研究協力者のメンバーの属性（ 宮城県 H 市 1 市 ）

1. 県（ 人） 2. 市町村（6 人）

問 1－1．発災（3 月 11 日）から 3 月 14 日頃（フェーズ 0・1）に行政職員として優先して実施した業務はどのようなことでしたか。

- ・避難所運営の補助。避難者の保温のため、毛布等の配布。
- ・救急パックを持って避難所へ。当初予定していた避難所が使用できなくなったため、市職員と避難者の誘導。
- ・津波に飲まれた避難者向けに、タオル、毛布等の準備。怪我人の手当。救急パックの中身は限られているため、全員に行き渡らず。
- ・救急パック不足分は学校の保健室から援助を受ける。その他、保健室の先生との連携がうまくいった。
- ・川から津波が逆流してきたため、準備していた保健師マニュアル、要救護者台帳などを持って避難。
- ・一緒に避難した医師、栄養士などと避難者の保温、治療などをおこなった。
- ・総合支所が全壊したという情報から、職員は自分達だけかもしれないと思った。
- ・追分温泉を本拠地として、炊き出しを行うため食料の確保、また安否確認などすることをリストアップ。一般住民等の協力も仰ぎ、チームを結成する。地区で生き延びようという感じだった。
- ・3 日後に他の職員と連絡が取れ、そちらの災害対策本部の傘下に入ることに。
- ・生きることに精一杯で、「何が欲しい」と具体的に申し出ることがとっさにできなかった。薬など差し迫ったものは出てくるが、服、下着などまで頭が回らず。
- ・避難所設営の指示をされたが、何をしたらよいか分からなかった。
- ・おにぎりづくりなど、食料の確保。
- ・事務所にて避難所設営準備をしていたが、津波が来ていることがわかり、避難する暇もなく屋上に逃げた。体の不自由な方を屋上に上げるために必死だった。
- ・波が引いた後、屋内に避難したが、窓ガラスが割れて外と同様の状態だった。毛布も十分無く、職員はゴミ袋に穴を開けてかぶっていた。
- ・避難者が障害者、お年寄りが多かったため、一晩中トイレ介助をしていた。
- ・次の日から他の職員と合流。避難者リストの作成を始める。
- ・職員の入れ替わりの時期だったため、指示系統が上手く行かず混乱。その中でなんとか役割分担をしていた。
- ・避難所の怪我人の搬送手配。
- ・4 カ月健診中に発災。母子を帰せるように準備。
- ・救急パックは 5 個ほどしか無く、全ての保健師が持てなかった。
- ・2 日目くらいから近隣の医師が薬等を持って診療に来てくれたので、補助を行った。
- ・日赤経由で来る避難所の対応をしたため、介護避難所のような所だった。オムツ交換や、透

析の必要な方をどうやって透析につなげるか、病院への送り迎えシステムを作るなどの業務に追われる。 ・電話が復旧する前は、消防無線に大変助けられた。 ・救急車、公用車でスムーズに移動できるよう、市でガソリンを買い占めた。
問１－２．発災（３月１１日）から３月１４日頃（フェーズ０・１）に妊産婦や乳幼児をもつ母子に対して、また、障がい児や低出生体重児をもつ母子にたいして、どのような支援（物資、場所、周知方法などを含めて）をしましたか、あるいはどのような支援が必要だったと思いますか（不足していた物資を含めて）。また、経験した困難やその解決策などをお聞かせください。
・発災直後、出先すぐに保育所があったため確認。 ・発災当日、避難所に妊婦がいるとの連絡を受け、対応に行く。保温するなどの対処。 ・避難所に来た保育士達が、避難が長期化することを考え、おもちゃ、おやつ等をカートに積んで持ってきてくれた。 ・食料が届いた時、大人達が群がってしまい、子ども達が食べられるようなものが何も残らなかったため、次回からは子どものためのものを優先的に確保することに。 ・妊婦が居たが、救急車を呼べない状況だった。「産気づいたら、私が車で連れて行く」といってあげるとだいぶ落ち着いてくれた。それを伝えるだけでも安心して一晩過ごせるのだなと思った。 ・避難所になっている支所に人がひしめき合い、衛生状態も良くなかったため、近隣の民家に妊婦を預かってもらえないか依頼。 ・避難所に乳幼児、障害者、高齢者の部屋を確保。
問１－３．発災（３月１１日）から３月１４日頃（フェーズ０・１）に、そのほかの母子保健に関わる事項（例えば、外国人母子への対応、親を亡くした子どもへの対応、性被害の予防など）で支援したことはありますか。あるいは、どのような支援が必要だったと思いますか（不足していた物資を含めて）。また、経験した困難やその解決策などをお聞かせください。
・障害児訪問中発災。酸素吸入等を使っている方だったため、保護者に酸素確保の方法、震災が長期化する場合の対処を教えた。 ・３/１４にＴＭＡＴが入る。１週間は医療の確保、避難所の状況把握をメインに行う。 ・３/１２ 日赤が薬だけを置いていき、診察は出来ないとのことだったため、薬の使用法を聞いて各避難所に配布。車がなくて思うように回れなかった。 ・情報が無く、ラジオなどで入る情報も全般的な情報しかもらえなかった。情報があるだけでも違ったと思う。
問２－１．昨年３月中（フェーズ２）に、妊産婦や乳幼児をもつ母親がいましたか。障がい児や低出生体重児をもつ母子がいましたか。いた場合、どのような支援（物資、場所、周知方法などを含めて）をしましたか。あるいは必要であったと思う支援がありますか（不足

していた物資を含めて)。また、経験された困難やその解決策などをお聞かせください。
・子どもを亡くした母親の話を聞くなどの対処。 ・3/16 から時間を決めてオムツ、ミルクの配給をおこなった。 ・オムツは最初は繰り返し使える方法などを伝えつつ配布。後に在庫がありすぎて処分に困ってしまった。 ・避難所の避難者の状況はわかるが、母子については不明なため、3/20, から全戸訪問調査を実施。 ・全戸訪問で得られた情報を元に、3月下旬から新生児訪問を開始。 ・母子に関しては早めに避難する人が多かったが、残っている乳幼児を避難所訪問の際ピックアップし、派遣医療チームにいる小児科医につなげるなどした。 ・避難して2,3日目を過ぎると夜泣きに対するクレームが多くなり、母子は離れていくことが多かった。
問2-2. 昨年3月中（フェーズ2）に、そのほかの母子保健に関わること（例えば、外国人母子への対応、親を亡くした子どもへの対応、性被害の予防など）で支援したことはありますか。必要だったと思う支援がありますか（不足していた物資を含めて）。また、経験した困難やその解決策などをお聞かせください。
・エコノミー症候群防止の為にポスター製作を子ども達に依頼。15程度作成して掲示。 ・3/22 に近隣のデイサービスセンターにてお風呂が使えるように。乳幼児等が使用。 ・インフルエンザ防止の為に乾燥を防ぐ目的で、霧吹きで水を撒く活動を開始。 ・3/19 に医療チームが入り始め、自分たちが避難所を回って見た状況を元に医療チームを派遣。 ・支援者に「何をしたらよいですか」と聞かれるのが一番怖かった。また外回りをしてきて拾ってきた問題の報告だけをされるのが困った。その問題を解決までしてきてくれないと困る。
問3. 通常業務、例えば乳幼児健診や予防接種などはいつ頃から再開されましたか。再開に向け苦労されたことや支援が必要であったことがありましたか。
・職場が流されたため、ブルーシート内で作業。 ・保健所の支援を受け、医療情報収集はそちらに任せ、自分たちは避難所運営と通常業務再開を行う。 ・保健所から支援に来てくれた保健師は交代の際に引き継ぎを行ってくれるが、行き届かない所もあったので、同じ人にやってもらうようにした。 ・地区内が4つにわかれており、津波被害は1箇所のみだったため、他の地区では通常の生活が戻っており、4月から検診の問い合わせが寄せられるようになった。 ・本庁から呼び戻され、4/6 から通常業務を始めつつ避難所まわりも行った。 ・母子手帳を再発行し、避難所に届けるなど行った。 ・4月中旬に3地区で健診について会議を行ったが、被災状況の差を考慮されないまま時期が決まった。こちらは医師も亡くなり、会場も流され、事務所もない状況だったので、他の所と会場をまとめてなど柔軟に対応してもらいたかった。

・「健診はできない。ほかと合同でやる」と告知を出して、落ち着いて再開に望んだほうが良かったのかも。 ・避難所に母子がバラバラに避難していたので、健診の告知が大変だったが、健診会場で母子同士が再会し悩みや不安を相談し合えたのは良かったと思う。
問４－１ 昨年４月から５月（フェーズ３）に、妊産婦や乳幼児をもつ母親がいましたか。障がい児や低出生体重児をもつ母子がいましたか。いた場合、どのような支援（物資、場所、周知方法などを含めて）をしましたか。あるいは、どのような支援が必要だったと思いますか（不足していた物資を含めて）。また、経験した困難やその解決策などをお聞かせください。
・職員がほぼ亡くなっていたため、避難所運営を一般住民にまかせていたが、母子のプライバシー用にパーテーションを用意したところ、全体把握がしにくくなると責任者に断られてしまった。交渉の仕方を考えればよかった。 ・支援者に在宅避難者や被害の無かった箇所の巡回を依頼。そこで出てきた母子問題等に個別に対処 ・産婦人科が早めに退院してもらわなければならないため、新生児訪問を早く再開して欲しいと依頼。そのための連絡先確保、名簿作成など行う。 ・高齢者などと違って、母子は問題や困っていることを表に出してくれないので、健診で乳幼児健診を早めに行うことが必要と考えた。受診率は高く、そこで母親の不安などを聞くことができた。
問４－２．４月から５月（フェーズ３）に、そのほかの母子保健に関わる事（例えば、外国人母子への対応、親を亡くした子どもへの対応、性被害の予防など）で支援したことはありますか。必要だったと思う支援（物資、場所、周知方法などを含めて）がありますか。また、経験された困難やその解決策などをお聞かせください。
・タイ人の妊婦のために、タイ語を喋れる専門学校講師探し、連携。 ・産科がある病院が被災のため開けず、産科医と産科のない病院でも健診が行えるように依頼をしにいく。以前産科をしていた病院にも、緊急時協力をしてもらえるよう依頼。 ・支援物資管理を行いつつ、避難所の訪問をするのが大変だった。
問５－１．昨年６月から９月まで（フェーズ４）に、妊産婦や乳幼児をもつ母親がいましたか。障がい児や低出生体重児をもつ母親がいましたか。いた場合、どのような支援（物資、場所、周知方法などを含めて）をしましたか。あるいは、どのような支援が必要だったと思いますか（不足していた物資を含めて）。また、経験された困難やその解決策などをお聞かせください。
・新生児訪問に関して支援するとの申し出があったが、そこに関しては大切なところなので、業務が忙しかったが支援は謝辞した。今考えると、そうしたことで母親といろいろな話が出来たのが良かったかと思う。
問５－２．６月から９月まで（フェーズ４）に、そのほかの母子保健に関わる事（例えば、

外国人母子への対応、親を亡くした子どもへの対応、性被害の予防など）で支援したことはありますか。必要だったと思う支援がありますか。また、経験した困難なことやその解決策などがあればお聞かせください。
・母親が避難所でせわしなく動いていて、子どもが相手をしてもらえない。精神的に不安定、下痢などを繰り返す子どもが居たため、小児科医につなげる。
問6-1. 昨年10月以降から現在まで（フェーズ4）に、妊産婦や乳幼児をもつ母子、障がい児や低出生体重児をもつ母2に対しどのような支援（物資、場所、周知方法などを含めて）をしましたか。あるいは、どのような支援が必要だったと思いますか（不足していた物資を含めて）。また、経験した困難なことやその解決策などがあればお聞かせください。
・避難所ができてから、支援の保健師に巡回をお願いし、自分達は通所業務に戻ったが、後から聞くと「状況の分かっている地元の人と話すのとは違う」と、言われたため、無理してでも自分達が回ったほうが良かったのかと悩む。
問6-2. 10月以降から現在まで（フェーズ4）にそのほかの母子保健に関わること（例えば、外国人母子への対応、親を亡くした子どもへの対応、性被害の予防など）で支援したことはありますか。また、必要だったと思う支援がありますか。また、経験した困難なことやその解決策などがあればお聞かせください。
・母子保健業務継続
問7. 発災前には、どのような母子保健活動をしていましたか。その時に課題であったことは、発災後はいかがでしたか。
・今回の被災で母子とそれを取り巻く地域の力の大切さを実感した。
問8. 災害を経験され、平時から必要な母子保健活動として、どのようなことがあると思われますか。
・在宅避難者に関しては、民生委員など日頃から地域を回っている人から気になる人の情報を提供してもらい、一緒に訪問など連携ができた。自分たちで拾えない範囲まで網羅できて良かった。
・避難所に居る看護師や、地区の人達のちからをもっと求めれば良かった。求められるような関係を作って置く必要があった。
・医師、日赤などの連携を今回の件でさらに深めることができた。
問9. 支援者ご本人やそのご家族の健康管理、あるいは生活管理をどのようにしていましたか。また、どのように健康管理や生活管理をする必要があると思いますか。
・上司が大きな地震を経験しており、「まず一度家にもどれ。家族がどうなっているか確認してこい」と時間をくれた。今思うとそれがとても助かった。
・自宅が浸水しており、家族と連絡が取れない状況でも、一度その事を確認する時間が持てると「次は何をしよう」と気持ちの切り替えができる。
・自分のことを配慮する時間は、上から指示をもらえないと持てない。
・保健師自身のペースを保つことが大切。元気の無い人に仕事をしろというのが無理。

- ・他所から来た保健師が「あなた達を休ませるために来ました」と言ってくれたが、状況は全く変わらなかった。支援の方が課長や上司に言ってくれたが、変化なしだった。
- ・市民の目があるので、休むなんてとても出来ないという状況だった。終わりが見えないので、ぼうっとすることが多かった。
- ・心のケアとしてセラピストに話を聞いてもらうより、長期の休みが欲しかった。まとまった休みがケアになると思う。家族との時間を持つだけでもだいぶ違う

インタビューガイド

研究協力者のメンバーの属性（ 宮城県 1市 2市1町 ）

1. 県（ 人） 2. 市町村（6人）

問1-1. 発災（3月11日）から3月14日頃（フェーズ0・1）に行政職員として優先して実施した業務はどのようなことでしたか。

- ・市役所に皆が避難してきたが、すぐにいっぱいになったので、各所に振り分け。
- ・濡れてきた人のための着替えの確保、毛布の確保、保温。
- ・怪我人の救護、救急車で搬送できるよう手配。
- ・避難所の夜の巡回、体調不良者などを見まわる。
- ・保健師でグループを組み、避難所・病院を巡回。病院で医療情報を集めて情報共有を行う。
- ・津波が来るという情報があったので、記録などを2階に上げた。
- ・避難所設営の支援、名簿作成。
- ・おにぎりなど食事の準備。
- ・窓口などで医療情報の提供。
- ・地元の開業医と避難所の巡回。
- ・健康状態チェック、トイレの使い方の指導（水で流せないため）。
- ・物資を取りに来た際に、家族の様子や健康状態の確認。必要なら血圧検査、医療情報、医薬品提供。

問1-2. 発災（3月11日）から3月14日頃（フェーズ0・1）に妊産婦や乳幼児をもつ母子に対して、また、障がい児や低出生体重児をもつ母子にたいして、どのような支援（物資、場所、周知方法などを含めて）をしましたか、あるいはどのような支援が必要だったと思いますか（不足していた物資を含めて）。また、経験した困難やその解決策などをお聞かせください。

- ・発災当日は一歳半検診の最中。まずは安全確保をし、みんなを一箇所に集めて座布団を被ったまま揺れが収まるのを待っていた。すぐに母子手帳を返して、すぐに家に帰れるようにした。
- ・避難してきた母子、乳幼児のために絨毯のある部屋を確保。泣いたり騒いでも大丈夫な場所を作る。
- ・妊婦がいたので、静かな場所で休めるように手配。
- ・ミルクのためのお湯がほしいと言う声があり、家から持ってきてくれる人がいた。しかし水が少ないので、なぜあの人だけなどの声が出ており、母親は肩身が狭そうだった。
- ・乳児のための水、ミルクの確保。ミルク用のお湯は母子センターのプロパンガスが使えたので、それで沸かした。夜中でも欲しいという人のために大きなヤカンで沸かして、ポットに入れていた。大きなヤカンとポットは大事だと感じた。
- ・ミルクの粉はミルクを作るときに必要な量を渡していた。その時同時に母子の様子を聞いていた。
- ・オムツは備蓄と健診用に配るものがあつたので、震災当日は2、3枚渡せた。サイズは合っていなかった。

問１－３．発災（３月１１日）から３月１４日頃（フェーズ０・１）に、そのほかの母子保健に関わる事項（例えば、外国人母子への対応、親を亡くした子どもへの対応、性被害の予防など）で支援したことはありますか。あるいは、どのような支援が必要だったと思いますか（不足していた物資を含めて）。また、経験した困難やその解決策などをお聞かせください。	
・母親が流されてしまった子どもの対応をした。放心状態だったので、ひとりにせず誰かが話しかけ、そばにるようにした。	
問２－１．昨年３月中（フェーズ２）に、妊産婦や乳幼児をもつ母親がいましたか。障がい児や低出生体重児をもつ母子がいましたか。いた場合、どのような支援（物資、場所、周知方法などを含めて）をしましたか。あるいは必要であったと思う支援がありますか（不足していた物資を含めて）。また、経験された困難やその解決策などをお聞かせください。	
・助産師による沐浴指導（６日間）１３人参加。 ・３/２２に心のケアチーム来る。震災後笑わなくなってしまった１歳児に１時間強の面談をすることで最後には笑って遊べるようになり、母親が感動していた。早期の心のケアは重要。 ・母子手帳交付、再交付を開始。電話による妊婦の安否確認。再交付時にＰＣが使えたので、記録を写せるだけ写して渡した。 ・津波でなくなってしまった母子手帳を、他の市町村から譲り受けて発行。 ・新生児訪問開始。公衆電話でハイリスク家庭の安否確認。 ・支援物資が充実してきたので、サイズのあったオムツ、水、ミルクなどを渡せるようになる。 ・３/２０あたりから、在宅の乳幼児の訪問開始。巡回の際に渡せるよう、オムツ、ミルクを持って移動。不在宅には緊急連絡先を残しておいた。他県の保健師が来てくれたことで、新生児訪問も同時に行えた。	
問２－２．昨年３月中（フェーズ２）に、そのほかの母子保健に関わること（例えば、外国人母子への対応、親を亡くした子どもへの対応、性被害の予防など）で支援したことはありますか。必要だったと思う支援がありますか（不足していた物資を含めて）。また、経験した困難やその解決策などをお聞かせください。	
・予算が凍結していたが、ＮＰＯの支援で母子に関して予算がついた。 ・発達障害児の情報を聞いて巡回。 ・母親から子どもの様子がおかしいとの声が多数出てきたため、幼児～小学生、自閉症児を対象に県の緊急サポートチームと心のケアをおこなった。告知は避難所、小学校、公民館に回って行った。（７月まで継続） ・支援チームが入り始めたが、来る時は運転手（車、ガソリン含む）、実行部隊、事務方の３点セットできて欲しい。 ・「何をしたらいいですか」と聞かれることや、外まわりで集めてきた問題などを対応までせず報告のみで対応をこちらに任せられるのは一番困る。 ・報告書までまとめて、次の支援チームに引き継ぎ、場所確認までして欲しい。こちら	

には余裕が無いので。

- ・この時期の記録が何もとれていなかった。丸と日にちだけつけるチェックシートなどがあればよかった。

- ・支援物資は早めに分けて、保存する場所も物によって分けた方がいい。オムツは全てここ、医薬品は全てここ、というように。

- ・医薬品を避難所ではなく健康課で一括管理、必要な分だけ避難所に毎日届けるようにした。無駄がなくほめられた。

- ・この時期に、自分達の仕事を客観的に見てくれる立場の人が欲しかった。目の前の事に囚われすぎてまわりが見えていなかった気がする。

- ・県の職員などがつきっきりで入ってくれて、県との情報のやり取りを円滑にしてくれたらよかった。

問3. 通常業務、例えば乳幼児健診や予防接種などはいつ頃から再開されましたか。再開に向け苦労されたことや支援が必要であったことがありましたか。

- ・市内の2/3は無被害だったため、3月半ばから健診の問い合わせが来始めていた。なので、3月末に健診を開始した。(3/27: 3歳児健診 3/28:1歳6カ月健診)

- ・母子センターの1階が物資倉庫になったため、急遽2,3階のレイアウトを変更して行った。

- ・暖房がなかったため、乳児の健診は服を着たまま身体測定などを行った。

- ・タオル等を津波の際使ってしまったので、スタッフが自宅から持ち寄った。

- ・母子センターが津波に飲まれたので、3月は健診を行わないことに決定。テレビなどメディアで告知。

- ・まず書類のドロ取りが必要だった。変色や腐敗で廃棄しなければならないものがあつた。その作業と並行して通常業務再開準備をした。

- ・仮の母子センターが本部と離れていたため、情報の行き来が上手く行かず、歯痒い思いをした。

- ・4月の健診の準備のため、3月末は準備を行った。足りない機材を譲り受けたり、購入した。

- ・健診会場が見つからず、安全性の問題で貸すのは無理ということが多々あつた。

- ・3月中は健診を行えず、4月から開始した。窓口で来る方の個別対応は行った。

- ・3/20以降医師団がどんどん入ってきたので、自分たちは再開準備に手を付けられるようになってきた。

- ・ポリオワクチンがあつたため、その維持のために冷凍庫に保存。4月にポリオの予防接種。

問4-1 昨年4月から5月(フェーズ3)に、妊娠婦や乳幼児をもつ母親がいましたか。障がい児や低出生体重児をもつ母子がいましたか。いた場合、どのような支援(物資、場所、周知方法などを含めて)をしましたか。あるいは、どのような支援が必要だったと思いますか(不足していた物資を含めて)。また、経験した困難やその解決策などをお聞かせください。

- ・電話がつながるようになってから、予防接種の問い合わせが多くなった。他県に避難してい

る方が多く、そこで受けるにはどうすれば良いかと言う問い合わせ、その対応をした。 ・オムツ、ミルクの配布。アレルギーミルクなどの手配。 ・その他今までの活動の継続。
問４－２．４月から５月（フェーズ３）に、そのほかの母子保健に関わる事（例えば、外国人母子への対応、親を亡くした子どもへの対応、性被害の予防など）で支援したことはありますか。必要だったと思う支援（物資、場所、周知方法などを含めて）がありますか。また、経験された困難やその解決策などをお聞かせください。
・DVの被害を受けている外国人母子を人の多い避難所に隠した。 ・３月から始まった子どもの心のケアの継続。 ・心のケアが必要な人の抽出のため、阪神淡路大震災のものを参考に独自でアンケート作成。その結果を元にケアが必要な子供を児童相談所やケアチームとつなげる。 ・幼稚園や保育園をまわり、様子の気になる子どもをケアチームにつなげた。 ・仮設住宅で集まれる場所が欲しいとの意見があり、保健師が相談や遊びの支援に行く活動開始。 ・「子育て支援センターに行けば何か情報がある」と思って来てくれる母親が多く居たというのはいずれいい ・親を亡くした子ども、子どもを亡くした親は福祉部門の管轄で、対応はできなかった。 ・５月あたりから余裕のある母親から「何かできないか」「手伝う」との声が聞こえるようになった。
問５－１．昨年６月から９月まで（フェーズ４）に、妊産婦や乳幼児をもつ母親がいましたか。障がい児や低出生体重児をもつ母親がいましたか。いた場合、どのような支援（物資、場所、周知方法などを含めて）をしましたか。あるいは、どのような支援が必要だったと思いますか（不足していた物資を含めて）。また、経験された困難やその解決策などをお聞かせください。
・今までの活動の継続。 ・離乳食講習会の再開。
問５－２．６月から９月まで（フェーズ４）に、そのほかの母子保健に関わる事（例えば、外国人母子への対応、親を亡くした子どもへの対応、性被害の予防など）で支援したことはありますか。必要だったと思う支援がありますか。また、経験した困難なことやその解決策などがあればお聞かせください。
・全世帯へ心の健康のサポートブック配布。 ・子どもの心と体のアンケートで要フォローになった人への電話フォロー。専門機関紹介。 ・保育所への歯磨き指導。
問６－１．昨年１０月以降から現在まで（フェーズ４）に、妊産婦や乳幼児をもつ母子、障がい児や低出生体重児をもつ母２に対しどのような支援（物資、場所、周知方法などを含めて）をしましたか。あるいは、どのような支援が必要だったと思いますか（不足していた

物資を含めて)。また、経験した困難なことやその解決策などがあればお聞かせください。
・通常業務＋被災者支援。
問6－2. 10月以降から現在まで（フェーズ4）にそのほかの母子保健に関わること（例えば、外国人母子への対応、親を亡くした子どもへの対応、性被害の予防など）で支援したことはありますか。また、必要だったと思う支援がありますか。また、経験した困難なことやその解決策などがあればお聞かせください。
・今頃になって、ようやく親から「怖かった」という声が出てきた。子どものケアはもちろん、その親の心のケアの必要あり。 ・震災を機に出てきた子どもの問題は、震災以前の問題が出てきたにすぎない。これを機に「親子の愛着」を見直すカウンセリングを行なっている。そのためのセラピストはもっと必要。
問7. 発災前には、どのような母子保健活動をしていましたか。その時に課題であったことは、発災後はいかがでしたか。
・地域に入って、顔が見えるような活動をしていたので、今回色々な支援が上手く行った。 ・6万人の都市で顔が見える活動は難しい。大都市には応用できないかも。それを踏まえた対策を考えるべき。 ・震災前の計画段階で、保健師は避難所に配置されるのではなく、中央で一括配置にし、そこから指示を出して必要な場合避難所に向かうというように決められていた。その事が今回上手く行った要因だと思う。
問8. 災害を経験され、平時から必要な母子保健活動として、どのようなことがあると思われますか。
・災害計画では保健師の位置づけが救護となっているが、もっと具体的な指示、役割の提示の必要。 ・防災課や災害復興課はあるが、一切関わりがなく、提供した情報がうまく使われない。地域との繋がりや役所内の横のつながりが必要。 ・本拠地が被災し、データや機材が何もかも流された。避難するとき何を持っていくかあらかじめ考えておく必要あり。津波の来ない高台にバックアップなどをとっておけば。 ・保健師として以前に、一市職員として市民の様々な質問に答えられなければいけない。「これは私の仕事ではない」と言ってはだめ。常に勉強をしている必要あり。 ・今回のことで、市民や職員が保健師を必要と感じてくれたのではないかなと思う。
問9. 支援者ご本人やそのご家族の健康管理、あるいは生活管理をどのようにしていましたか。また、どのように健康管理や生活管理をする必要があると思いますか。
・10月あたりから保健師、栄養士共に燃え尽き症候群になっていた。母子と言わず職員の心のケアは必要だと思う。 ・家に帰らず、最初の頃は床にダンボールを敷いて寝ていた。冬なので風呂に入らなくても良かったが、夏ならば何か対策が必要。 ・他県の保健師から「7割で動くんだよ」と言われたのが印象に残っている。結局フルで働い

ていたが。

- ・職員はやって当たり前という雰囲気はあった。いまだに引きずっていると思う。
- ・無理にでも休むべきだった。休ませるべきだった。
- ・帰る度に、子どもに「行かないで」と泣かれるのが辛かった。その分いられる母親に「いっしょにいてあげて」と言うしかなかった。
- ・1週間に一度意識的に休みをとるようにしていた。そうしないと持たなかった。
- ・泣けない時期が4カ月ほど続いた。みんな聞けば大丈夫というが、そんなことはない。心の叫びを聞いてあげる時間をしっかり取ってあげて欲しい。

インタビューガイド

研究協力者のメンバーの属性（ 宮城県 J市 1市 ）

1. 県（ 人） 2. 市町村（1人）

問1ー1. 発災（3月11日）から3月14日頃（フェーズ0・1）に行政職員として優先して実施した業務はどのようなことでしたか。

- ・緊急対策本部ができ、発災後数時間待機。
- ・健康推進課・福祉課・障害福祉班、2課3班体制の配置、11日の発災でこれが一括配置に切り替わり、保健師は一般職員とは異なる保健師活動を専門で行える体制に。
- ・保健センターに集まり、近隣の避難所の巡回を行いながら災害活動。夜間は待機。早朝救出活動が再開。救出した高齢者、低体温症大変な状態の方、救急搬送、保健師付き添い。
- ・搬送作業の補助を12日未明からその日の午前中くらいまで続けた。衣服が濡れていた避難者の衣服を用意、水もなかったがガスコンロなどで水を温めて拭いて着替えさせ、ペットボトルにお湯を入れてカイロ替わりに保温。レベルの下がっている人を病院に搬送
- ・救護所を開設、応急の救護。行ってもダメな人に関しては、病院に運ぶ作業。
- ・保健センターに避難してきた市民への対応、指定避難所はあふれかえっていた、指定外のお寺・大きなホール・本庁舎・保健センターにも避難されている方が来る状況。
- ・ここが避難所になると、私達の活動も制限を受け身動きが取れなくなるので、振り分け。社会福祉協会が福祉避難所設置。避難所の振り分け作業。
- ・医療救護班の活動。孤立してしまった地区に優先的に保健師と医療救護班がヘリで向かった。そこで救護活動。
- ・日赤の方に朝晩調整会議のために出かけ、医療救護がどれくらい必要か打ち合わせ。医療チーム調整、医療班と同行する保健師の割り振り作業の管理。全体調整と実働を保健師チームの中で担当を振り分けながら入組んだ動き。
- ・19日以降医療救護班のみの単独活動、活動状況は日赤の医療本部に直接報告するルートを作り保健師の同行は取りやめ。こうした活動の中で保健師が必要なケースがあれば、ピンポイントで入っていく体制で進めた。日赤に毎朝8時と毎晩9時、状況説明と指示受け。
- ・到着する医療班編成、地域全域をくまなく回れるよう、効率の良いスケジュールを立て調整。やれる人がやっていた、誰かの指示ではなかった。
- ・14日までは主に災害業務一色、母子よりも。

問1ー2. 発災（3月11日）から3月14日頃（フェーズ0・1）に妊産婦や乳幼児をもつ母子に対して、また、障がい児や低出生体重児をもつ母子にたいして、どのような支援（物資、場所、周知方法などを含めて）をしましたか、あるいはどのような支援が必要だったと思いますか（不足していた物資を含めて）。また、経験した困難やその解決策などをお聞かせください。

- ・保健センター、感染症疑いの子ども、マイコプラズマ、手足口病の疑いの方、新生児・子ども連れの方、福祉避難所に入りきれない高齢者など引き受けた。そういった方の相談業務。
- ・新生児、病院もあふれかえっていた。産後のケアもあまりなされないまま退院という方が多

かった。産後1日目で退院など。食べ物も水もなかったので、何とか手に入った食品を母親を呼んであげた、産婦や子どものいる母子にはできる限りのことをした。

- ・発災当初は避難所に身を寄せてるが、子どもを持つ方は若い方が多く機動力がある。被害にあってすぐに自分で動かれたり、親御さんが迎えに来たり、意外に少ないといった印象。赤ちゃんを育てる環境、移動できる方はどんどん良い場所へ避難されていった。

- ・保育所が津波、小学校に園児が歩いて避難。その体育館に津波。子ども達が一晩水に浸かっている状態。子ども達はすさまじい体験、預かっていた子どもはだれも亡くなっていないのが唯一幸い。

子ども達は親が迎えに来て家族のもとに。連絡がつかなかった子どもは市役所での引き渡し。

- ・生後9か月、手から血を流した母親が赤ちゃんを抱っこして歩いてきた。海岸を走行していて津波に飲み込まれた。民家に避難しながらここまで来た。コンタクトつけたままで結膜炎で赤く涙目の状態。職員が車を出し同行し近くの病院へ搬送。生きるか死ぬかの状況、救助がメインだった。

問1-3. 発災(3月11日)から3月14日頃(フェーズ0・1)に、そのほかの母子保健に関わる事項(例えば、外国人母子への対応、親を亡くした子どもへの対応、性被害の予防など)で支援したことはありますか。あるいは、どのような支援が必要だったと思いますか(不足していた物資を含めて)。また、経験した困難やその解決策などをお聞かせください。

- ・親御さんが亡くなってしまった子どももずいぶんいたと思う、かかわることは保育士が直接やっていたので、保健師が直接かかわることは無かった。

- ・大人で統合失調症の方の薬が切れて暴れだす状況、症状が出た場合対応。

- ・自閉症のお子さんが避難所で大変という情報が上がる、力のある母親は自主的に場所を探して移って行ったと聞いた。直接は入って来ない。

- ・重度の子どもは居た、直接どのような形で避難されたのかは入ってきてない。自主的に色々なところで動いていたのか、動きが早かったと思う。

- ・外国人はアジア系の方が多い、この災害で特に何かという方は居なかった。通常地域の母親という感じで動かれていたと思う。

問2-1. 昨年3月中(フェーズ2)に、妊産婦や乳幼児をもつ母親がいましたか。障がい児や低出生体重児をもつ母子がいましたか。いた場合、どのような支援(物資、場所、周知方法などを含めて)をしましたか。あるいは必要であったと思う支援がありますか(不足していた物資を含めて)。また、経験された困難やその解決策などをお聞かせください。

- ・3月中旬以降、医療チームが独自に動かれるようになった、配置の調整と情報を受けての対応の処理で毎日。

- ・沿岸の方が被害が多かった。開業医も亡くなり無医村の状態、医療環境が悪かった。その地域に医療救護班とシフト、ハイパー・アンビュランスという機動力のある大きな救護車来た。車の中で診療が行えるので、巡回プラス、臨時診療所として医者のない地区のカバー。

- ・3月後半、合同本部で朝晩の医療ミーティング、医療救護班の調整も単独で行うようになった。
- ・母子の部分では、母子手帳交付・妊婦健診、妊婦も待ったなし。津波で流されたための妊婦健診の助成券・金券などの再発行を窓口対応。かなり多く出た。
- ・保健センター自体、被害はなかった。パソコンが動かせたのも大きかった。電気は通っていないが、予備電源が使用できたのでデータ整理など情報処理にかなり有効だった。本部に行き、初動で集めた避難所情報を持って医療救護班の獲得に動いていた。
- ・巡回では、各避難所の避難者の数や救護車、医療を受けている人の数などを入力しながら管理。本部しか灯りが無い、そこにパソコンを持ち込んで作業。
- ・メールは始めのころは難しかったので、USBメモリに保存し、向こうのパソコンで開いて説明した。
- ・災害協定についても日赤とは特にしていなかった、地元の病院と協定。小さな病院なので全然動けなかった、調整して何とか獲得して道筋をつけた。
- ・避難所、13日から18日までは保健師が同行、アセスメントしていった。フォーマット、合同医療本部の方で作成。それを使って各項目をチェック。要救助者、産婦人科のニーズ、外科ニーズなど、誰が行っても同じアセスができるシートを使ってチェック。水、電気、ガス、暖房、食糧、トイレの衛生環境など…全部。
- ・インフルエンザが散発発生し始めたのが3月からアウトブレイク、蔓延するのを防ぐための対策、嘔吐・下痢があったときにノロが疑われたのでその対策。要フォロー者も名前でガンガン上がってくる、その方を追っていく作業。
- ・物資関係で足りないもの、暖房・毛布とか避難所の担当部署が対応。
- ・市は自主防災組織を立ち上げた。自助・共助のまちづくり、市民自体も一緒に動くのがテーマ、地区で防災組織を立ち上げているところ、うまく行っていないところ、職員が補強されて配置されているところなどあった。学校だと、平日だったので先生たちもそのまま残って、防災組織に加わる方もいた。
- ・健診から母親達が困っていることを聞いた。住居や、生きるためのこと、生活しづらさなどが多かった。
- ・母親で震災の話ができる方は少なかった。家族や子どもが亡くなったという事実はまだ消化できていない状況。自ら話せる母親達には寄り添って話を聞くといった心のケアを行った。まだ大変な状況。
- ・外部からの支援者、自治体それぞれやり方が違い難しい。お手伝い頂いたのは医師だけ。地元医師会にも普段はお願いし来て頂いたが、医師の方で対応できない午前中の現地健診等の場合、長期の支援に入って頂いた国立医療チームに相談、その時だけ来て頂き対応をお願いした。
- ・物資は大変だった。ミルク・オムツがない、3月の発災当初から。保健センターにもらいに来る方が結構いた。あまり差し上げられない、少しずつ配布、また来て頂く状況。
- ・支援物資、避難所内では健康管理の窓口の方が対応。在宅、あるいは避難所で配布されても

足りない母子がセンターに訪れるという状況。 ・最初は近くの薬局にうちの保健師・栄養士の物資担当が見に行って、離乳食・ミルク・オムツなどを調達。その後は行政職員の方が一括で担当、県の方に依頼して物資が入ってきたという状況。 ・3月の比較的早い時期、他県の防災部長と電話で話し必要物資を持ってきて頂いた。当時避難所に食料を供給する役割を担っていた給食センターにつないで、野菜や食料を活用してもらった。 ・食料関係の支援物資を保健センターに運ぶといわれたので、避難者もいる、薬だけで手いっぱいの状況なので給食センターに運ぶよう依頼。 ・本庁舎の物資担当の方で管理。センターにもらいに来る人も多い、本庁舎の方からある程度こちらにもストックをお願いした。
問2-2. 昨年3月中（フェーズ2）に、そのほかの母子保健に関わること（例えば、外国人母子への対応、親を亡くした子どもへの対応、性被害の予防など）で支援したことはありますか。必要だったと思う支援がありますか（不足していた物資を含めて）。また、経験した困難やその解決策などをお聞かせください。
問3. 通常業務、例えば乳幼児健診や予防接種などはいつ頃から再開されましたか。再開に向け苦労されたことや支援が必要であったことがありましたか。 ・予防接種は早かった。集団から個別に切り替わる年、病院で対応が可能であればすぐできるような状況。震災を機に、BCGも個別化に切り替え対応できるようにした。ポリオも今年になってから個別に。・ポリオの再開は6/28、2か月遅れ。健診も6月。6/12を皮切りに3/12以降中断した4か月、1.6、2.6、3歳児健診の4回分を順次再開。初めは中止分もあったので、3月・4月対象分を午前午後で対応、次の7月を5月・6月分をするというように時間を詰めて消化。通常に戻ったのが9月～10月くらい。 ・応援保健師には、4月後半から「健康支援調査」生活状況や心の部分をスクリーニングしていく大規模な調査、最終的には7800世帯分22000人を対象とした調査、その調査員として動いてもらった。仮設は5月のゴールデンウィーク明けくらい。 ・避難所は医療班が入っていて状況がつかめている、リーダーとも話ができています。在宅部門をどうするかという課題に対し、支援調査を始めた。地区分担を決めて回って頂いた。 ・市単独調査。宮城県北部沖連続地震、震度6弱、5強が1日に3回続いた地震。それをもとにマニュアル作り、その時も健康調査、それをもとに動いていた。
問4-1 昨年4月から5月（フェーズ3）に、妊産婦や乳幼児をもつ母親がいましたか。障がい児や低出生体重児をもつ母子がいましたか。いた場合、どのような支援（物資、場所、周知方法などを含めて）をしましたか。あるいは、どのような支援が必要だったと思いますか（不足していた物資を含めて）。また、経験した困難やその解決策などをお聞かせください。